

Women & Work

夫の転勤に同行し海外で暮らす「駐在妻」。かつては専業主婦のイメージだが、駐在中も自らのキャリアを模索する女性が増えつつある。ただ、滞りや夫の会社の制度など、国内にはないハードルも立ちはだかる。

駐在妻は人材の宝庫

クライアントの会議に参加する加治屋真実さん(東京都港区)



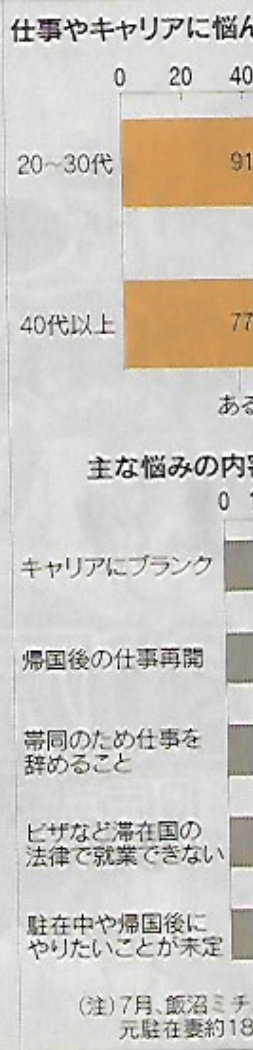
ブラジルで営業・人事コンサル

海外駐在に伴いながら働く自らの経験を基に7月、ブラジルで働く女性らと共同でインターネット上のコミュニティ

「遠隔でも働ける通信技術の進歩に助けられた」と加治屋さん。顧客企業との信頼関係を築くため半年に1度は帰国し、現在は3社と直に顔を合わせる。

ブラジルに来たのは1年半前だ。商社勤務の夫の転勤に同行するため、勤めていたリクルートを退職した。海外で働くには、はじめの半年は主婦生活を送った。しかし、仕事の張り合いがない日々。「自分はブラジルまで夫のご飯を作りに来たのか」と気落ちし、夫婦関係もぎくしゃくし始めたという。

「通信進歩、遠隔でも働ける」



そこで調べ上げたのがブラジルのビザ制度や税務などについて。フリーでビジネスの相談に乗る事業を始めた。当初は知人につけて頼りだったが、徐々に信頼を得て、仕事の依頼を受けるようになった。

加治屋さんに経営企画の業務を委託しているマーケティング会社、フェズ(東京・港)の伊丹順平社長はこうした駐在妻を「人材の宝庫」と評する。高いレベルの能力や職務経験をもちながら「働きたくて仕方ない」と思っている。同社はメガバンク出身でニューヨークに住む別の駐在妻にも遠隔で仕事を依頼している。

キャリアを追求する女性が増えた現在、家族の都合で海外に移住しても、仕事を続けたい女性が増えているようだ。シンガポールで日本人向けの情報会社にパート勤務する小野麻紀子さん(35)は「はたらくママ@シンガポール」の会を運営している。会には約300人が会員登録。中でも求職者の大半が駐在妻だという。

会員は子どもの預け方などの情報を交換したり、海外生活を経たキャリア形成のための勉強会をしたり。「日本ではコストや文化的な理由で家事援助のヘルパーさんは雇いにくい、簡単に頼める。かえって働きやすいという人もいる」と話す。